

## 後期：現代キリスト教思想研究2——現代あるいはポストモダン

オリエンテーション+研究発表

1. 解釈学的神学と現代思想
2. 政治神学1——シュミットとモルトマン
3. 解放の神学1——フェミニスト神学1
4. 解放の神学2——フェミニスト神学2
5. 政治神学2——アガンベン
6. 政治神学3——ジジェク
7. 研究発表
8. 研究発表
9. 研究発表
10. 解放の神学3——黒人神学
11. 解放の神学4——アジア 12/19
12. 宗教の神学とヒック 1/9
13. エコロジーの神学 1/16：レポート提出（締めきり）

## &lt;前回&gt;スラヴォイ・ジジェク

## A. 『脆弱なる絶対——キリスト教の遺産と資本主義の超克』

## 1. 思想状況・問題：

・「ポストモダン時代とその「思想」とやらにみられるもっとも悲惨な状況のひとつは、宗教的な要素が様々な衣をまとって回帰していることである」

「原理主義」「〈ニューエイジ〉的精神主義から脱構築主義そのもの」(7)

・「ある種の多文化主義的梦想が悪夢に転じたもの」(11)

・「反転した人種差別」「置換された人種差別の論理」(13)

↓

・ラカン派マルクス主義者ジジェクの提案。

「戦略を逆転すること」「キリスト教とマルクス主義のあいだには直接的な系統関係があるのだ。そう、キリスト教とマルクス主義は新種の精神主義の襲撃に対して一致協力して戦うべきなのだ」、「聖パウロ」(8)、「聖パウロを離れてキリストは存在しない」(9)

## 2. 例外と普遍、戦う普遍性

・「例外が[普遍的な]規則に基礎を与える」(164)

・「真に弁証法的な問題は、連鎖と例外が直接的に一致することである」、「例外的な形象の連鎖」(165)

・「この新しいコミュニティーは明らかに除け者たちの集団として、既存の「有機的な」グループとは正反対のものとして構成されている」、「異常な」除け者コミュニティー「の系譜」(175)

・「真に信じる者は仮象を、ひとつの仮象を通じて輝き出す神秘的な次元を、信ずる」、「彼は他者のなかに、他者本人すら気づいていない〈善良さ〉を見出す。ここでは、仮象は現実にはもはや対立していない」(181)

・「〈絶対的なもの〉は脆弱ではかないものである」、「そうした奇跡的な、しかし同時にきわめて脆弱な瞬間において、われわれの現実にはまったく別種の次元が生ずるのである」(182)

## 3. キリスト教はいかなる意味で愛の宗教か。

・「愛は社会のヒエラルキーの偉大なる粉碎者ではないのか」(178)

・「愛において、そして愛という動機から、愛する者を憎め」、「私は、かけがえのない人間として彼を愛するがゆえに、社会的-象徴的構造に取り込まれた彼の側面を「憎悪」

するのである」(179)、「社会的役割」やイデオロギー的な機能や仮面の下に隠れている「現実の人間」をみるべきである、というありふれた「ヒューマニズム的な」思想とはいっさい関係ない「聖パウロは、断固たる「理論的反-ヒューマニズム」の持ち主である」、「だれをも人間的な見方によって知ることはすまい」(180)

## B. 『操り人形と小人——キリスト教の倒錯的な核』

1. 「宗教が、もはや特定の文化的生活形態に完全に組み込まれたり、それと同一化したりするのではなく、自律性を獲得し、その結果、様々な文化にまたがる同じひとつの宗教として生き残ることができるような体制——これは、近代のありうべき定義のひとつである。宗教は、このように蒸留されることによって、みずからをグローバル化できるようになる」(8)

・「宗教的な問題に関して第一に銘記すべきことは、「深遠な精神性」への言及がふたたび流行していることである」(12)

・「昨今の漠然とした精神主義」(16)、「キリスト教のグノーシス主義的異端と同質のもの」(17) ↓

・「キリスト教の転覆的な力を秘めた核は」「唯物論的アプローチによってしか理解できない」、「真の弁証法的唯物論者になるためには、キリスト教的な経験を経るべきなのだ」(13)、「聖パウロの使徒書簡」「人間としてのイエス」「対して、まったく、おどろくほど無関心であることがわかる」、「イエスの死と復活という事実を確認したあと、パウロは、彼の本分であるレーニンの仕事、すなわち、キリスト教共同体と呼ばれる新しい党を組織する仕事に向かう」、「レーニン主義者としてのパウロ」(18)

2. 「ジャック・ランシエール」「社会組織のなかに固定された場所をもたない、排除された者である彼らは、みずからを〈社会全体〉の、真の〈普遍性〉の代理人、代表として提示したのである」、「部分ならぬ部分」(98)、「政治とは本来、つねに、〈普遍〉と〈特殊〉とのある種の短絡を含んでいる。つまり、それは、「普遍的かつ単独的なもの」というパラドクス」(99)

「それ自身に固有の、特定の場所を占めることができないこうした主体は、普遍性そのものを具現している。根源的な政治的普遍性」「と、例外に基礎づけられた普遍性」「を対置したとき」「ポイントは、根源的普遍性を作動させる単独的な要因は、〈残余〉そのものである、すなわち、例外に基礎づけられた「公式の」普遍性のなかに固有の場所をもたないものである、ということだ」(164)、「排除されたものたち」、「パウロの普遍性は、特殊な内容を容れる空虚で中立的な容器としての沈黙した普遍性ではなく、「戦う普遍性」、特殊の内容全体を貫通する根源的な分割というかたちとなって現れる普遍性である」(165)

3. 「シェリングの問い」「〈神〉の人間化、永遠性からわれわれの現実というかりそめの世界への神の降下」は「〈神〉自身の視点からみれば上昇なのだとしたら?」「〈神〉が十全な現実化を得るための」(22)

・「真の愛とは、まさしく、約束された〈永遠性〉を不完全な個人のために捨てるという、それとは反対の動き」「愛のために永遠の存在を放棄する身振り」

・「永遠性が究極の牢獄、息の詰まるような閉域であり、時間への転落だけが人間の経験に〈開け〉を導入するのだとしたら」「**「顕現」**という〈出来事〉」(23)

・「〈神〉が〈神〉のものから捨て去られたことを告白するその叫びの瞬間」、「〈神〉が一瞬であれ無神論者に見える宗教」、「キリスト教は、おそろしいまでに革命的になる」「〈神〉が単に全能であるだけでは完全ではないと感じた宗教は、地上に宗教多しといえどもキリスト教においてほかない」(25)

↓

・「われわれが〈神〉と同一であるのは、あくまで、〈神〉が〈神〉自身と同一ではなく、自己とを放棄したとき、つまり、〈神〉とわれわれとを隔てる根源的な距離が、〈神〉そのものに

「内在化」されたときである。〈神〉からの分離という根源的経験は、まさに〈神〉とわれわれをひとつにする要素なのだ。ただし、そういえるのは、われわれはおすした経験を通じてはじめて、〈神〉の根源的な〈他者性〉と正面から向き合うことになる、というありふれた神秘主義的な意味においてはではない。屈辱と苦痛は、唯一の超越論的な感情であるというカントの主張と同じ意味においてである。わたしは神の至福と同一化できるという考えは、ばかっている。わたしは、〈神〉からの分離という無限の痛みを経験してはじめて、〈神〉自身（〈磔〉になったキリスト）と経験を共有することができるのだ」（138）

## 10. 解放の神学3——黒人神学

### （1）解放の神学とその多様性

1. Christopher Rowland (ed.), *The Cambridge Companion to Liberation Theology*, Cambridge University Press, 2007(1999).
2. ラテン・アメリカの政治的解放の神学（カトリック教会）、フェミニスト神学、黒人神学、アジアの解放の神学（民衆の神学など）。

解放の神学の多様性は、現代における「罪＝抑圧」現象の多様性に対応している。

民族・人種、政治・経済、ジェンダー・文化

「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由の身分もなく、男も女もありません。」（ガラテヤ 3:28）

### （2）黒人神学と社会的構想力

3. コーン『抑圧された者の神』新教出版社。

#### はじめに

「私は黒人神学の知的基盤を論じ、被抑圧者に対する神の解放に終始しないような、いかなる福音分析も「それ自身」非キリスト教的であることを、神学的に明らかにしようと努めてきた。」（1）

「ここではただ、そもそも神学者たちが自らの状況の諸限界を忘れて、自分たちはあらゆる所であらゆる人々のために語っているのだと思いつく時だけに、彼らの神学はイデオロギーと化し、したがって抑圧的・帝国主義的になるのだ、ということを目指すれば十分であろう。欧米神学の多くは、たといそれが解放や自由について語っている場合でも、そのような性格を帯びている。」（6）

「すべての神学は特殊なものであり、したがって、その特殊性によって限界づけられているが、所与の特殊性が指示している真理は限界づけられていない。」

「解放という黒人神学の主題に耳を傾けることは、われわれの連関の中で自由の真理のために闘うということである。私が黒人性の具体性を強調するのは、その特殊性こそが、私の社会的・政治的連関の中で抑圧とは何であり、解放とは何であるかを、最もよく説明しているからである。」（7）

## I 序論

「黒人の宗教と白人の宗教は本質的に同じものである。なぜなら、白人が黒人に「キリスト教」を紹介したのだから、というように仮定することは、もちろんの可能である。しかしながら、そのような仮定は、神学者から黒人の宗教的思考様式に対する生き生きとした洞察を剥奪してしまうことになるであろう。なぜならば、そのような仕方では、思考と社会的実存との間にある重要な関係を認識することができないからである。」（32）

「白人神学校の教授たちだけでなく、あの黒人たちもまた、白人的経験だけが神的事柄に関する問いと答えのための適切な文脈を提供しているのだ、と今まで確信してきたのである。彼らは自らの経験の狭さと、自らの神学的表現の特殊性を認識していない。」（38）

「私の論点は、われわれの社会的・歴史的文脈は、ただわれわれが神に語りかける問いだけでなく、その問いに対して与えられる答えの態様ないし形式をも決定する、ということである。」(39)

## II 真理を語る

「黒人経験の神学的機能を探究すること」

### 神学の資料としての黒人経験

「黒人神学は、黒人経験の構造と形式を明らかにしなければならない。なぜならば、解釈の諸範疇は、黒人経験それ自体の思考形式から生起してくるものであるからである。」(42)

「それは教会的経験と同じ歴史的共同体から創出されたものであり、したがって、自らの夢と大望に基づいて生を形成し、かつ生きようとする、人々の試みを表現しているからである。このような黒人的経験に含まれるものは、動物物語、民話、奴隷の俗歌、ブルース、個人的経験の記録等である。」(51)

「黒人経験についてのもう一つの重要な神学的資料は、奴隷および元奴隷の物語、すなわち、黒人の勝利と敗北の個人的記録である、「もっと最近の黒人文学」「ハーレム・ルネッサンス(一九二〇年代および三〇年代)の詩人たち、およびその後継者たち」「自由への闘いを指摘ヴィジョンで表現した。」(56)

「われわれ黒人神学者たちは、真理を「語る」ためには、黒人性についての真正の経験を提示しなければならない。」(60)

### 黒人経験・聖書・イエス・キリスト

「黒人神学の資料としての黒人経験は、伝統的なキリスト教神学の資料として同定されている聖書に対して、どのように関係づけられるのであろうか」(60)

「彼らは単に自分自身のことだけを取り扱っているのではないということである。彼らはもう一つの別の現実について語っているのである」、「黒人神学を単に黒人の文化史に解消してしまうことを防いでいるのは、この超越性の肯定なのである。黒人にとって、超越的現実とは、聖書が語っているイエス・キリストにほかならない。聖書は、イエス・キリストにおける神の自己啓示の証言である。かくして、黒人経験は聖書が黒人神学の一資料であることを要求しているのである。なぜなら、まさに聖書こそが、奴隷たちに、奴隷主たちのそれとは根本的に異なる神観を肯定することを可能ならしめたからである。」(61)

「イエス・キリストの証言としての聖書の重要性はだからといって、黒人神学が西欧キリスト教の伝統と歴史を無視してよい、ということの意味するものではない。それはただ、その伝統についてのわれわれの研究は、黒人によって解釈されたような仕方での、聖書に啓示されたみ言葉の理解の光に照らして遂行されなければならない、ということの意味しているのである。」(62)

「われわれは初代の教会教父たちを、彼らがわれわれの現代的状況の危急的問いを提示していないという理由で批判することはできない」、「だが他方において、われわれに過去の信仰解釈者たちを評価することを可能ならしめる、人間経験における共通要素というものも存在する。」(62-63)

「神学の主題とは、神学的言説の厳密な性格を造り出し、そのことによって、神学的言説を他の言説から区別するところのものである。それとは対照的に、神学の資料とは、神学の主題を正しく表現せしめうる材料のことである。イエス・キリストは、黒人の希望と夢の内容であるゆえに、黒人神学の主題である。」(63)

「黒人性と神性とは、一つの現実性として弁証法的に結合されるのである。」(68)

「イエスを被抑圧者の解放者として見ることをしない、いかなる時代の福音解釈も異端的

である。」(70)

## V 黒人神学とイデオロギー

「神学者たちが問わなければならない問いは、彼らの神学が社会的利害によって規定されているか否か、の問題ではなく、むしろ、「誰の」社会的利害、抑圧者か、それとも被抑圧者なのか、という問題である、聖書的立脚点からして、単に、イデオロギーとは神のみ言葉の、あるいは社会集団の願望との同一視である、というだけでは、間違いである」、「貧しき者の歴史的意識から生起してこない神学は、イデオロギーなのである。」(145)

「神学がそれについて語る、神的啓示は、人間的経験から引き出した、言語学的諸定式に閉じ込めてしまうことはできない。したがって、自らの思惟範疇の有限性を受容しようと思わず、あたかも自分が全真理、しかも真理のみを知っているかのように語る、いかなる神学も、神冒瀆、つまり、神的真理のイデオロギー的歪曲の罪を犯すのである。」(146)

「白人神学とイデオロギーとの同一視は、私の発生学的起源とは帰属を異にする同僚神学者に対する、無鉄砲なこきおろしとして、意図されたものではない」、「わずかの例外を別にすれば、これらの福音解釈者たちは、余りにも白人文化の社会的先験性に規定されているために、有色人種の解放はせいぜい周辺的命題であるにすぎない、ということである」、「特定な白人神学者の悪しき意図のせいであるよりも、彼らの思考がそこに生起する、社会的連関によるものである。」(147)

「キリスト教神学者とは、それゆえ、社会的実存と神的啓示との微妙な均衡関係に固着しつつ、福音解釈へのその解釈学的意識が、被抑圧者の自由の闘いによって、規定されている人のことである。」(148)

「解放の物語と神の物語との同一視は、人間的状況から引き出したものではない。キリスト教神学は、人間的必要性から神へと進行するのではなく、神の啓示からわれわれの必要性へと進行する。」(150)

「このような批判的問いについての決定は、彼らの自由への闘いの根源でありたもうお方の、出来事を通しての臨在に出会う際の、解放の闘いの中にある人々にこそ、委ねなければならない。」(152)

「真の検証は、われわれが、自由のための歴史的闘争において、同じ側につくように導かれるか否かに、かかっている。」(153)

「「客観的に証明する」方法は何もない」(153)

「だが、このような譲歩は、無制限的な相対性を肯定するものではない」、「超主観的な「何事か」は、物語において言い表わされるし、事実、物語において具体化されているのである。」(154)

「すべての民族は、語るべき物語、すなわち、彼らが自分の存在理由を規定し、かつ肯定する際に、自分自身と子孫たちと世界に向かって、自分たちがいかに考え、いかに生きているかについて、語るべきなにかを持っている。物語は、無から有へ、非存在から存在へと移行する、奇跡を言い表わし、かつそれに参与するものである。」(154)

「われわれは、聖書物語は、われわれの主観的状态から独立している、それ自身の完全性と真理を持っている、と仮定しなければならない。われわれは、何でもかんでも、聖書物語の中に読みこむ自由を持ってはいないのである」、「彼の物語は、われらと共にいたもう、彼の臨在の恵みによって可能とされる信仰を通して、われわれの物語となるのである。」(156)

「彼らが述べた言葉を、真剣に聞くことによって、われわれは、われわれの現在の主観性から導き出されるのである」、「われわれ自身の時代と状況の外にいる、他者に耳を傾けることによって」(157)

「われわれ自身の物語がイデオロギー的になる、つまり、真理を聞くことを不可能にする

閉じられた体系になるのは、われわれが、他の物語を聞かなくなった時である。」(158)

4. コーンの人権神学における社会的構想力の問題  
イデオロギー批判：福音の解放性・真理の歪曲、普遍性の偽装  
物語の特殊性（自己同一性としてのイデオロギー）  
とその複数性（他者への開放性）
5. 社会的構想力：経験と聖書との間（二つの地平）  
経験：個人と共同体 → 特殊と普遍  
物語：解放、解放する真理、解放の物語 → ユートピア  
聖書：夢の素材そして規範、聖書を通じた他者の物語への開放性

↓

人間的現実性を構成する虚構の働き

小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会。

6. キリスト教神学（思想）の解釈学的構造：  
聖書的地平と思想主体の歴史的地平、問いと答え。
7. Cornel West, *Prophesy Deliverance! An Afro-American Revolutionary Christianity*,  
Westminster John Knox Press, 1982.  
, *The Cornel West Reader*, Basic Civitas Books, 1999.

#### <参考文献>

1. Anthony B. Bradley, *Liberating Black Theology. The Bible and the Black Experience in America*, Crossway, 2010.
2. James H. Cone, *God of the Oppressed*, The Seabury Press, 1975. (コーン『抑圧された者の神』新教出版社。)
3. コーン『黒人霊歌とブルース アメリカ黒人の信仰と神学』新教出版社。
4. M・L・キング『自由への大いなる歩み 非暴力で闘った黒人たち』岩波新書。
5. E・F・フレイジア『アメリカの黒人教会』未来社。
6. 末吉高明『黒人文化と黒人イエス』日本基督教団出版局。
7. 栗林輝夫『現代神学の最前線 「バルト以後」の半生記を読む』新教出版社。
8. 宮平望『現代アメリカ神学思想 平和・人権・環境の理念』新教出版社。